

ルポ 思いをかたちに

10年の歳月をかけて完成した痰の自動吸引システム

大分県勤労者医療生協

寄せられる感謝の言葉

大分県勤労者医療生協の理事長であり、大分協和病院の院長でもある山本真医師のもとに全国から感謝と喜びの声が届いています。

「夜間に痰の吸引で起こされるのがなくなり、助かっています」

「稼働中はとても快適です。車椅子に座った状態でも痰が吸引できるため、格段にQOLが向上しています」

「自動吸引システムの導入で、患者さんの安全と同時に、看護師の負担が大幅に軽減されました」

いくつもの目覚まし時計

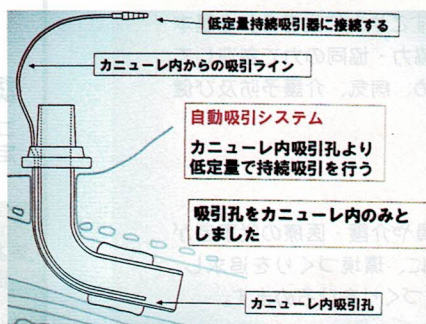
呼吸器内科を専門とされる



痰の自動吸引を可能にした気管カニューレ高研「ネオブレス W-SUCTION」



自動吸引用ポンプ「アモレSU1」。低定量持続吸引が可能に



「ネオブレス W-SUCTION」の図解。気管カニューレに吸引ラインが内蔵されている

る山本医師は、ALS（筋萎縮性側索硬化症：進行とともに全身の筋肉が動かなくなっていく難病）と闘う患者さんの在宅医療にとりくんできました。ALSの患者さんは、呼吸を確保するために気管切開をおこない、人工呼吸器を装着します。合わせて痰の吸引にも気を配らなければなりません。痰の吸引は、夜も昼もないので

す。ある日の往診先でのこと。ベッドサイドに置かれたいくつもの目覚まし時計が山本医師の目に入りました。不思議に思い、「時計を集める趣味をお持ちなのですか？」と尋ねました。すると、「痰の吸引には夜も昼もありません。寝込んでしまいう wakeにはいきませんから、目覚ましは何個も必要なのです」という答えが返っ

てきました。目覚まし時計は、介護する側の大変さを物語っていたのです。そのとき、山本医師は強く思いました。自動で痰を吸引する装置はできないものか…。もし、それができれば、吸引のたびにカテーテルを挿入される患者さんのつらさも軽減できるし、介護する側の負担も飛躍的に軽減できる。それが、10年前のできごとでした。

長期戦

山本医師はにっこり笑っています。

「僕は機械いじりが好きなんです。だから、大変だったというより、楽しかったというのが実感ですね」

しかし、お話をうかがうと、試行錯誤と苦闘の日々がにじみ出てきます。自動で痰を吸引するためには、吸引のためのカテーテルを常設しなければなりません。人工呼吸器との同居を可能にしなければならぬわけです。また人工呼吸器とは別に、吸引用のポンプを組み合わせ



装着されている気管カニューレ「ネオブレスW-SUCTION」

なければなりません。しかも、装着したカテーテルで気管の粘膜を傷つけてはならないし、万が一呼吸困難に陥るようなことがあったら、それこそ一大事です。一度は、断念せざるを得ないというところまで追いつめられました。やっと光明が見えたのは、つい最近のことです。人工呼吸と痰を吸引するためのカテーテルを同居させ、常設できる道が開けたのです。人工呼吸を確保しながら、痰を自動的に吸引するシステムが10年の歳月をかけてでき上がったのです。

組み合わせの妙

痰を緩やかに、しかも持続的に吸引するためのシリンドーポンプは大分県内で福祉用具を取り扱う業者が中心になって開発。人工呼吸を確保するための気管カニューレと痰を吸引するた

めのカテーテルの組み合わせは山本医師が中心になって工夫に工夫を重ねました。この2つが組み合わせること、痰の自動吸引が可能になったのです。やっと、思いがたちになりました。

痰を吸引するための自動吸引ポンプは2008年に厚生労働省の認可を受け、徳永装置製「アモレスU1」として製品化されました。また、人工呼吸と痰の吸引を組み合わせた気管カニューレも10年に認可され、高研製「ネオブレスW-SUCTION」として製品化されました。やっと一般的な使用が可能になったのです。ただし、この2つが一体化された医療器具になっているわけではありません。これらの製品を組み合わせ、医師の責任のもとに使用することになります。自動吸引システムと呼ぶ由来がそこにあるのです。

呼びかけ

山本医師はいます。

「このシステムはALSの患者さんに限らず、気管カニューレを装着して痰に困っているという患者さんならどなたでも使えます。患者さんの負担も、医療スタッフや介護をする人たちの負担も確実に減ります。ぜひ試してほしいと思います」

(大峰順二)



山本 真医師

お問い合わせ先
大分県勤労者医療生協
電話 097-5668-2209